

昭和と彩った

日本の石油化学工業

三井石油化学
石井保治氏
鳥居隆相談

昭和電工の足跡

「」で多少横道にそれるが昭和電工における安西鈴木の関係については史的な面から少し触れておきたい。

「」下をあげる海渡

昭和電工はこの会社は昭和の化学工業史に多くの業績を残していることで知られる。とくに昭和の初めに財閥系企業集団に対抗するよびに派生した技術を中心とした新興の企業集団は俗に「コンツェルン」と称され、鮎川義介の日電、野口大内正敏の理研などがあ

あつたが、独り森のみは明治三十年（一九〇七）高等小學校を修むるや十三歳で家業であつたヨードの原料となるカジメという海渡を焼く仕事に就いた。このカジメ焼きが森の実業入りを決意づけたといふ。

ヨードは化学薬品の原料であつたが同時に火薬の原料でもあつた。ヨードはカジメを焼いてケルプというヨード灰を採集し、そこからヨードを精製していた。

ヨードはケルプの中に二〇%ほどの塩化カリが含まれていてそこからナトリウムとヨードを交互に反応させてその成分を交換し、新たな物性を有する二種類の物質を生成

する。により火薬の原料としたものである。

このカジメからヨードという事業は日電、日露戦戦役の形勢で発展するが、その当時、カジメが製造する量の多かつた房総沿岸は数多くの採集業者がいた。森の父もその一人でも、と千葉市房総郡清海村で長いこと納税をしていた。

しかし、ヨード事業の発展に刺激されて明治三十年（一九〇七）にカジメ焼きに手を附けた。

森がコンツェルンを形成できたのは森の器量と認められた。一人のヨード事業家の協力によるものであつた。その事業家は味の素の創業者として名高い鈴木三郎助である。

鈴木三郎助と森の間の出会いはケルプの争奪戦がきっかけであつた。

川島三浦郡栗山であり、明治二十三年（一九〇〇）からヨードの製造に乗り出した。ところが栗山の海岸はカジメを採集するにはあまり有利ではなかつた。原料の安定確保という問題に直面した鈴木が明治二十九年（一九〇六）鈴木製薬所を興し、東京湾を挟んだ対岸の房総館山に進出すること

水産を設立。鈴木製薬所との戦いに臨んだ。この房総の水産は社長に森の父がなつた。森は営業部長として実際に社業を取り仕切つた。この時、数人の取締役を選出したが、その中に後に森の女婿となり、昭和電工の社長、会長となつた安西正夫の父直一がいた。

三年間に及ぶが、両者は突然のうちに和解する。それは鈴木が決戦を避けて、森の房総水産に鈴木が建設した安房炭産製造所を現物出資すると

いう形で収束する。条件は房総水産が鈴木製薬所に相製ヨードや塩化カリを供給することである。

時に明治四十四年（一九一〇）五月であつた。

森は鈴木よりも二十三歳も下であつたがこの提携以来、ことごとくに鈴木に師事すること原かつた。鈴木もまた森の才覚を知れば知るほど頼りにした。かくして森は鈴木から事業についての要諦を學び、電気化学

を中心とした化学肥料から日本

で初めてのアルミニウム工業を興すなどその事業の範囲はとどまらなかつた。昭和の初めから、まさに昭和初期のコンツェルンを代表するものであつた。

この森に大きな影響を与えた鈴木三郎助の下で、専務として三郎助が創業した「味の素」を日本の代表的企業に発展させる基礎を築いたのが弟忠治であつた。

鈴木忠治の五男が昭和電工の社長、会長となり、名譽会長となつた鈴木清雄である。

息の合った二人

このよつな因縁から安西、鈴木は成人するとも父祖伝来の事業の発展に取り組み、戦後はその再建と拡大に尽くしてきた。しかし、二人にとつて占領下に発生した「昭電騒動」は予想もしない人生の辛酸をなめるところになつた。一時富国生命社長佐竹次郎であつた。石川は昭電会長に復職したが、もっぱら経団連会長としての仕事に重きを置いていた。（敬称略）

（筆者は梅野稔彦本紙主幹）

の度合いは兄弟でもうはいくまいといわれるほどのものがあつた。

昭電の経営陣は騒動事件以後、経団連団体連合会会長のまま石川一郎が会長となり、日東化学副社長であつた永井清次が社長となつた。しかし、この二人は相性が悪かつたのか、ことごとくに角突き合はせることが多く、経営はいまひとつ迫力に欠けていた。ところが二十六年八月、永井が忽然と世を去つたため、石川が会長から社長に就任するといふ事態となつた。だが、石川は経団連会長の椅子に恋々としていたため、内外から批判が集中した。

当時、昭電の大株主で富国生命社長から日本興業銀行総裁となつた小林中や富士銀行頭取迫道二（後会長）らの擁護でよつやく社長の椅子を明け渡すことになつた。小林が推薦したのが富国生命社長佐竹次郎であつた。石川は昭電会長に復職したが、もっぱら経団連会長としての仕事に重きを置いていた。（敬称略）

（筆者は梅野稔彦本紙主幹）



森田親氏

鈴木三郎助と森の間の出会いはケルプの争奪戦がきっかけであつた。

川島三浦郡栗山であり、明治二十三年（一九〇〇）からヨードの製造に乗り出した。ところが栗山の海岸はカジメを採集するにはあまり有利ではなかつた。原料の安定確保という問題に直面した鈴木が明治二十九年（一九〇六）鈴木製薬所を興し、東京湾を挟んだ対岸の房総館山に進出すること

水産を設立。鈴木製薬所との戦いに臨んだ。この房総の水産は社長に森の父がなつた。森は営業部長として実際に社業を取り仕切つた。この時、数人の取締役を選出したが、その中に後に森の女婿となり、昭和電工の社長、会長となつた安西正夫の父直一がいた。

三年間に及ぶが、両者は突然のうちに和解する。それは鈴木が決戦を避けて、森の房総水産に鈴木が建設した安房炭産製造所を現物出資すると

いう形で収束する。条件は房総水産が鈴木製薬所に相製ヨードや塩化カリを供給することである。

時に明治四十四年（一九一〇）五月であつた。

森は鈴木よりも二十三歳も下であつたがこの提携以来、ことごとくに鈴木に師事すること原かつた。鈴木もまた森の才覚を知れば知るほど頼りにした。かくして森は鈴木から事業について

の要諦を學び、電気化学

を中心とした化学肥料から日本

で初めてのアルミニウム工業を興すなどその事業の範囲はとどまらなかつた。昭和の初めから、まさに昭和初期のコンツェルンを代表するものであつた。

この森に大きな影響を与えた鈴木三郎助の下で、専務として三郎助が創業した「味の素」を日本の代表的企業に発展させる基礎を築いたのが弟忠治であつた。

鈴木忠治の五男が昭和電工の社長、会長となり、名譽会長となつた鈴木清雄である。

息の合った二人

このよつな因縁から安西、鈴木は成人するとも父祖伝来の事業の発展に取り組み、戦後はその再建と拡大に尽くしてきた。しかし、二人にとつて占領下に発生した「昭電騒動」は予想もしない人生の辛酸をなめるところになつた。一時富国生命社長佐竹次郎であつた。石川は昭電会長に復職したが、もっぱら経団連会長としての仕事に重きを置いていた。（敬称略）

（筆者は梅野稔彦本紙主幹）

昭和と彩った

日本の石油化学工業

題字は三井石油化学
相談役鳥居保治氏

「非独占」の契約書

戦後の昭和電工経営は、
佐竹社長に就任した頃
から軌道に乗るようになっ
た。といっても佐竹が卓越
した経営力を發揮したから
ではない。

佐竹は甲州の産、大正十
年（一九二二）東京帝大経
済学部卒で満鉄に入り、三
年ほどして富岡徴兵保険に
転じ、以後、朝鮮鉄道や殖
産事業に関係し、四十九歳
で古巣の富國生命副社長と
なり、小林のおとを襲って
社長となった。

話は元に戻るが、ニュー
ヨークに着いた一行は、一泊
のあと、翌日の昼まで丸紅
飯田ニューヨーク支店にい
るいろと打ち合わせをした
上で、この支店に勤務して
いた日経二世の杉山という
男を伴って午後の飛行機で
パートルズビルへ飛んだ。

この日経二世は明治大学を
出たとかで英会話はもちろ
ん日本語も堪能であったが
ら通訳としては十分な能力
があった。

開かれた交渉

ニューヨークとオクラホ
マ州のパートルズビルの間
は当時で約六時間ほどの航
路であったから一行が現地
に到着したのは十四日の夕
方近くであったろう。



「パートルズビル」近郊

のアンスタントであるA.
D.フィッシュベックであっ
た。

に直ちにフィリップスが用
意した賓客用の宿舎に案内
され、その旅費を解いた。

で何も決めない。いたずら
に時間を引き延ばして相手
が折れるのを待つというや
り方をすると、先入観を
抱いたまうであらう。たか
ら、今回はすべてを海外担
当者にまかせるといふ態度
に出た。カーンとフィッシュ
ベックは最初から昭和電工
との契約に関するドラフト
を提示した。ドラフトの内
容は古河に示したものとほ
んど変わりはなかった。

どであった。いつした交渉
の内容はいかに筆舌を尽く
しても実感として伝わるも
のではないであらう。とに
かく当事者のみがその退屈
なことやエキサイトした場
合の情景を実感として味わ
うだけである。

最終ドラフト作成へ

交渉のポイントは古河の
場合と大差なかった。契約
の期間をいつまでにするか
とか、その間の特許使用は
どこまで認めるのか。対価
は妥当なのか、もつとこじ
ディスプレイする気はな
いのか。契約と同時にどう
してもインシアル・フィー
の支払いは必要なのか。工
場の建設に際してのギアラ
ンティーはどうか。別
会社にライセンスする場合
は無償でなければならぬ
という。日本での市場開用の
サンプルについて製品の供
給保証とそのコスト問題な
どであった。

安西ら一行の心理状態を
推測すればこの交渉の全過
程を通じて相手の主張や説
明を完全に理解しようとい
ふ努力と自分らは二番手だ
から相手のいうことが多少
無理であってもここはひと
つとんな我慢をしても呑ま
ざるを得まいという忍耐力
との狭間にあつて神経的に
はかなり疲れる作業であつ
たであらう。

近藤の回想では「昭和電
工と当社（丸紅飯田）の間
で二枚月、寝食を忘れ
て取り組んできたプロシエ
クトがいまようやく実を結
ぼうとしている。とくにこ
の技術の導入交渉について
の両社のオリエンテーショ
ンは見事なほどの中した。

「非独占」をベースとした
本契約に関する協議はすべ
ての点で両社間に意見の相
違がないことを確認しまし
た。そこでいまままでの合意
を踏まえて明日の朝、非独
占契約書の最終ドラフトを
つくることにしよう。

「訂正」前回の文中に「房
給水産」とあるのは「総房
水産」の誤りでした。

たしかにここまで近藤
らが組み立てたストーリー
通りに事は進んだ。だが、
この感動も一夜明けた十七
日の朝には無残にも打ち砕
かれる。

（筆者は榎野博彦本紙主幹
「訂正」前回の文中に「房
給水産」とあるのは「総房
水産」の誤りでした。

昭和と彩った

日本の石油化学工業

— ⑩ —
題字は三井石油化学
相談役鳥居保治氏

寝耳に水の独占契約

安西、斎藤、近藤に通訳の杉山を含めた一行は下ラフトの調整と契約調印という手順を想定しながらフィリップス社の心接室に入った途端、少し前から一行の到着を心待ちにしていたらしいカーンとフィッシュベックの大層なゼスチュアに迎えられた。安西にはこの二人のゼスチュアは昭電との契約が成立するのを心から喜ぶ姿に映った。

長い交渉の始まり
全員が出席するとフィッシュベックが分厚い書類を安西らに一部ずつ配った。三人は落ち着かない様子で書類に目を落とした。三人の目が期せずして書類の第一ページにタイアップされた「エクスクリューティブ・プリヒリッ

たわれわれの無礼をまず陳謝いたします。しかし、事態はあなたがお考えになられているよりもはるかに深刻です。というのはあなたがたよりも先にわれわれとフィリップス法ホリエン

ン製造技術のライセンス交渉に入っていた会社、もちろん日本の会社ですが、そこがどうしても独占で契約したいと言ってきました。その会社にはわれわれは交渉の優先権を与えていません。このままでは同様の契約を優先しなければなりません。このためわれわれは非常に困っています。しかし、われわれはあなたがたとの交渉過程を慎重に検討した結果、ミスター・アンザイの昭電化工付委合

「ミスター・アンザイ、確かに唐突な変更で驚かれましたかと思えます。一方的にこのような方式を提案し

とって有利なものはいつまでもないはず。当社のトップの方針も独占を支持していません。そこでわれわれとしてはあなたに独占契約の優先権を上げざるを得ないとしたんです。



安西正夫氏

も十分な検討を必要としていることはお分かりいただけるものと思つた。

「安西としては何か元々の非独占契約でいくことはできなかつたかと思つた。それからは長い交渉の始まりだ。しかし、相手はコンパティブルが独占を希望しているというところを忘れてはならないと何度も言った。

「もうこの入札ですぐ決めて頂きたいと言っているわけではありませんが、いろいろな面から検討しなければならぬことはよくわかりました。とにかく、明日までお待ち致しませう。

「フィリップス法ホリエンザイ、非独占でやるよりも独占契約の方がはるかに事業の成功率が高いことはお分かりでしょうか。とにかく、さう。とにかく、さう。

「さういふことで交渉を終わりたいと思つたが、いかがでしょうか。ところで時間も時間ですからまた夕食を一緒にしませんか。」

「いままで納得していた二十五万から一筆に倍の五十万、(二億八千万円) 耳を揃えてこの場で支払わなければならない。しかも、この支払いを日本政府の認可以前に供託するというのが下手をする外為法違反の可能性すらあるということも金額が大きいだけに安西の決心を鈍らせた。いずれにしても特許料、ノウハウ料合わせて三百三十万(十二億八千八百万円)それに輸入機械代金がざっと二百二十万(七億九千二百万円) 総額二十億近い巨費を投入してまでやらなければならぬ事業である。ひょっとしたらこのフィリップス法以外に同じような技術がこのアメリカでもっと安く手に入るといふこともあるのではないか。それよりも果たしてこのホリエンを中心とした石油化学事業は成功するのか。これほどの金を使つならもっとほかに有利な事業があるのではないか、など思えば思つほど気力は萎えていくようになった。

「日本を窺つ時に腹積もりしていた資金の倍はかかるといふこと、インシアル・フィーも

二十九年十一月以来、二十億円のままであった。これが四十四億八千と倍額増資を行つたのはフィリップスとの交渉が終わつた年の秋。すなわち三十一年十一月のことである。年間売り上げは約二百三十億、利益約十億程度だった。

「安西は昭電と食事を取る意欲も失せてフィリップスの寮用宿舎に帰り着いた。フィリップス社の門を出てから宿舎までの間、安西は極端に言葉が少なくなっていた。斎藤や近藤が話しかけてもほとんど反応はなかった。(敬称略) (筆者は梅野樫本紙主幹)

昭和と彩った

日本の石油化学工業

◎◎◎
題字は三井石油化学
相談役鳥居保治氏

企業生命を賭けて

宿舎に入って四人は感懐
間に集まって対策を協議し
たが、これという案など
浮かぶわけはなかった。問
題は買つか、買わないかと
いびつに一つの選択をす
るだけだったが、その選択
は大変なことをいふべき
れ、昭和電工の企業生命
を左右する重大な問題と
いってよかつた。

「世界にポリエチレン技
術がいつかあるかという状
況を考へてみると、もうほ
んどないというのが実情
でしよう。デュポン、UO
Cにあるにしてもこの商
社は絶対といっていいほど
ライセンスする意欲はあり
ません。いま買える技術が
あるとすれば、このフイリッ

「運命決めた国際電話
斎藤が思い余って言葉を
発した。

昇は近藤を悔悟の淵に立た
せるに十分なものがあつ
た。
午後十一時半、けたたま
しく鳴る電話のベルで
安西は思索の糸が断ち切
られた。近藤がきくと立っ
て部屋の戸限に置かれた交
話器を取った。
「イエス・ヒー・イズ・
ヒア、ジャスト・モーメ
ン・プリーズ。」
近藤が安西の方を向いて



鈴木忠治氏

「近藤君、わたしもさう
思つ。しかし、どう考へて
もいまのわが社の力から
いってこのよ様な大きな資
金負担に耐えられるかと
いふことも考へないわけには
いかない。百歩譲って
買つとするか。果たして事
業として成功するか。しな
かつた時は会社全体を犠牲
にするか、つなごうとするか
も知れない。もう一人事業
にリスクはつづきのだから
あえてそのつづきも設備
しなればならぬというが
あることは承知してゐる
もろだ。とにかく東京の鈴
木君に電話を入れて、よく
話し合つてみてそれで駄目
なら、自分の前に広がる情

本社につながつた交話器
を差し出した。安西がそれ
に飛びついた。手に取った
交話器に口と耳を押しつけ
るよつに「鈴木君、大変な
ことになつた」と西宮が
めづられる見通しがないなら
安西の心を出すわけにはい
きません」と言ひ出した。
近藤は「もうその点
は手力を尽くしますから、
安心ください」とお見
栄を促す言葉を返した。た
ゞ、このよつに安西が必
ず、鈴木君は多少の条件に

時差十四時間、間違いな
く東京の真昼の一時半であ
る。電話の向うでは鈴木
も安西の苦悩を分かちあつ
ように応答してゐるよう
だつた。
「おまりの巨額な経費
なので、それが何としても
心配なんだ。この事業は
まのこの海のものでも
山のものともわからないも
のだから不安だね。きみが
止めようと言へば、日本
わたしは止めよう日本
へ帰るよ。」
安西の弱氣をい
える率直な心理が三
人の胸をいつと縮
めつけた。そして電
話はおもつた。
かれこれ三十分も
経たぬ頃、安西の肩に
もの張りとおちが戻つてき
た。

驚いては何もできな
く振かておつた。責任は自
分が取るともいおつた。
とにかく鈴木君の意欲を聞
いてわたしも決心がついた
よ。やはり何が何でもやり
抜くという決意が大切だ
な。考へてみれば、神戶の方
がいいに決まつてゐる。
あつちへも、こつちへも同
じ技術を出されては市場で
混戦するだけだからな。
なに、ライセンス料なん
て事業が成功すれば軽
いものになるはずだ。斎藤
君、勝負はこれからだよ。
安西のこの約交ひりに齟
齬の三人は呆気にとられる
ばかりだつた。そしてその
直後、全員が急に空腹痛を
覚えたといふ。

「この時の国際電話を回想
して鈴木は言つ。
「あの時、安西さんとし
ては心の底から迷つていた
んだと思つてゐます。だから
一回も大丈夫なうかと聞
いてくれた。しかし、わ
たしはあの当時の昭和電工
の現状から、つて何として
も新しい事業に出るか、発
展の道はないと思つていま
した。その新しい道をいつ
のは有機合成であり、その
代表的な分野が石油化学で

いふことだつたんです。も
ちろん石油化学がどのくら
い発展するかはよく知るわ
けもありませんが、したが
、何となくこの事業は夢があ
るなという思いが強かつ
た。だから安西さんには電話
の向うで随分悩んでおち
れたが、わたしは躊躇する
ことなく、とにかく買つて
きてください。あとは何と
かしますと言つた記憶があ
る。さういふいつかにもわ
たしが独断でやつたやつに
聞「それが、さうではな
安西さん達が出かける前に
十分な打ち合せもして
たし、佐竹社長への了解も
ちゃんと取りつけておいたの
でその当初方針を貫くよ
うお願いしたまでなんです。
それにしてもあの時、フイ
リップスの技術を買つてお
かなかつたついまの昭和電
工の石油化学事業は、いま
で発展してゐなかつたとい
までも思つてゐるが、ありま
す。」
鈴木君の経営者としての独
特の勘と胆腑がものをい
たといふのは、はなはだ、こ
れも戦前、味の素を造り、一
流の企業に育て上げた実業
家、知られる父忠治の血を
間違ひなく引いてゐたこ
ういふことになつた。(敬称略)
(筆者は柳野雄彦本紙主幹)

昭和と彩った

日本の石油化学工業

— 15 —

題字は三井石油化学
相談役鳥居保治氏

正式契約に調印

明けて四月十八日午前、安西ら四人は再び、フィリップス・ペトロリウム

本社の役員応接室に顔を揃えた。「昨日のおなたがた

のオファーを正式に受諾する」と安西が告げた途端、

カーンとフィッシュベックの二人は歓聲に近い声を上げた。次の瞬間、カーンが安

西の手を固く握って祝福の言葉を述べた。カーンや

フィッシュベックの手は奇麗や近藤、そして通訳の杉山

にもものびていった。

苦難に満ちた追憶

「契約書の草案は昨日、お渡ししてありますが、おだ、それに事業に対しては大変シャープだ。そして度

す。何かご意見はありますか。」

カーンが改まった口調で安西に訪ねた。

「いや、細かいことはまたあとで調整しなければならぬが、一応大筋では結構だと思つたのでそのまゝにお運びください。」

安西は一切の迷いを振り切ると、明快に答えた。

調印はフィリップス会長アダムスと安西の間で行われた。

その日の夕方、両社の提携を祝ふ宴が張られた。

「ミスター・アンザイはなかなかダンディーな男

だ。それに事業に対しては大変シャープだ。そして度

胸もいい。こういう男を

パートナーにすることができたことは自分にとって無上の喜びだ。」

アダムスは安西を盛んに持ち上げた。

「ありがとう。ミスター・アダムス、この活気に満ちたパートルズビルの街を開拓したのはあなたが大の祖先だと聞いて、あなたはその伝統を受け継いで素晴らしいフロンティア・スピリットを發揮している

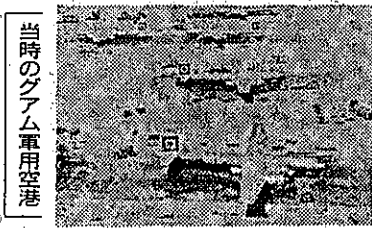
ことに心から敬意を表したい。これからはお互いに協力してよりよい成果をあげること而努力しようではありませんか。」

安西も負けずアダムスの気持ちに答へた。

「こつた両者のやりとりを横で聞いていた近藤の感概は一入(ひとしじ)であつた。思えば随分きわどい行

動ではあつた。しかし、丸紅飯田を起用してくれた昭和電工との間の誠意がこ

ころでいつきみのころには大いに協力を頼みする積もりだ。うちがなせきみのころに今回の仕事を頼んだかという、昭和電工には強力な商社が必要だといふことなんだ。実は去年、わたしは原千夫調査団に参加して欧米を回つたが、この時、行く先々で沢山の商談があつた。しかし、残念なことになつたのはほとんど



当時のアダムス軍用空港

「いろいろお世話をかけたが、よろしく頼みましたよ。ところで、きみ、昭和電工という会社は年間に一億円の償却をしているんだ。この償却費に新たな資金を加えてこれからはもつ

と大きな仕事をしなければならぬと思つている。そこでいつきみのころには大いに協力を頼みする積もりだ。うちがなせきみのころに今回の仕事を頼んだかという、昭和電工には強力な商社が必要だといふことなんだ。実は去年、わたしは原千夫調査団に参加して欧米を回つたが、この時、行く先々で沢山の商談があつた。しかし、残念なことになつたのはほとんど

この安西の言葉を近藤は「こつた両者のやりとりを横で聞いていた近藤の感概は一入(ひとしじ)であつた。思えば随分きわどい行

近藤は後に昭和電工の事業を始めた当時の関係者の思い出を綴つた文集に寄稿しているがその中でフィリップス生ポリエチレンの事業に100%の自信を持っていただけではなかつた。ただ、化学工業に身を

「どうかね、丸紅飯田が化学会社をひとつ持つたと思つて頭張つてもういたいんだ。とにかく、三井、三菱

に負けない仕事をしよう」と決心しているんだよ。

近藤が気がついた時、安西の手は近藤の肩を強くつかんで

「こつたと思ひは成功したからこそ逸論は「美論」となり、決断は「英断」となるわけだ。

フィリップスは契約調印の寸前になって「非独占」を「独占」にせよと主張し、

昭電の足元を見透かすような駆け引きをやつたが、このようなりかたは通常なら決して容認できなかったであつた。しかし、この時の昭電は「非常時」に直面していた。化学肥料やアルミニウムその他合金鉄、炭素材、研磨材など無機化学事業ではこれからの昭電経営の将来を展望することは困難だといふ明確な経営者の判断があつた。

「こつたと思ひは成功したからこそ逸論は「美論」となり、決断は「英断」となるわけだ。フィリップスは契約調印の寸前になって「非独占」を「独占」にせよと主張し、昭電の足元を見透かすような駆け引きをやつたが、このようなりかたは通常なら決して容認できなかったであつた。しかし、この時の昭電は「非常時」に直面していた。化学肥料やアルミニウムその他合金鉄、炭素材、研磨材など無機化学事業ではこれからの昭電経営の将来を展望することは困難だといふ明確な経営者の判断があつた。

「こつたと思ひは成功したからこそ逸論は「美論」となり、決断は「英断」となるわけだ。フィリップスは契約調印の寸前になって「非独占」を「独占」にせよと主張し、昭電の足元を見透かすような駆け引きをやつたが、このようなりかたは通常なら決して容認できなかったであつた。しかし、この時の昭電は「非常時」に直面していた。化学肥料やアルミニウムその他合金鉄、炭素材、研磨材など無機化学事業ではこれからの昭電経営の将来を展望することは困難だといふ明確な経営者の判断があつた。

「こつたと思ひは成功したからこそ逸論は「美論」となり、決断は「英断」となるわけだ。フィリップスは契約調印の寸前になって「非独占」を「独占」にせよと主張し、昭電の足元を見透かすような駆け引きをやつたが、このようなりかたは通常なら決して容認できなかったであつた。しかし、この時の昭電は「非常時」に直面していた。化学肥料やアルミニウムその他合金鉄、炭素材、研磨材など無機化学事業ではこれからの昭電経営の将来を展望することは困難だといふ明確な経営者の判断があつた。

昭和と彩った

日本の石油化学工業

＝◎＝
学油石油三井は字
氏治保居鳥役相談

仮契約書にサイン

第三十一号

昭和電工がパートルスビルのフィリップス・ペトロ

九日であり、昭電が契約するまで十日近い時間があつた。

一方、フィリップスがこの間に取った行動はかなりの巧妙であつた。フィリップスとは仮契約が整つた

らいつらでも提供するといつてその実施を見送つていた。それが突然のように仮契約に調印する前にサンプルの提供に踏み切つた。

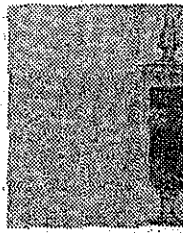
しかも、「現地時間九日に佐竹代表に非独占契約書のドラフトをお渡ししたの

は古河が一日も早く日本政府の認可が得られるよう取り計らつたものだ。とくに

来週は日本の他の会社を交渉する予定だが、その前にこうした措置をとるのは古河に対する当社の好意以外

何もでもない」と、カーンが大倉商事ニューヨーク支店長に語つたのは何を意味してゐたのか。

フィリップスは古河の交渉態度があまりに慎重なため、いざよふが興味を失いつつあつたことは明らかであつた。そこへもつて二月のはじめからスプラインを介して始まつていた昭電との話し合いがかなりスムーズに展開していったことがフィリップス社首脳陣に別な考え方を生ずるよう迫つたとしても不思議ではない。



マーレックスの見本

昭和電工がパートルスビルのフィリップス・ペトロ

九日であり、昭電が契約するまで十日近い時間があつた。

一方、フィリップスがこの間に取った行動はかなりの巧妙であつた。フィリップスとは仮契約が整つた

らいつらでも提供するといつてその実施を見送つていた。それが突然のように仮契約に調印する前にサンプルの提供に踏み切つた。

しかも、「現地時間九日に佐竹代表に非独占契約書のドラフトをお渡ししたの

は古河が一日も早く日本政府の認可が得られるよう取り計らつたものだ。とくに

来週は日本の他の会社を交渉する予定だが、その前にこうした措置をとるのは古河に対する当社の好意以外

何もでもない」と、カーンが大倉商事ニューヨーク支店長に語つたのは何を意味してゐたのか。

フィリップスは古河の交渉態度があまりに慎重なため、いざよふが興味を失いつつあつたことは明らかであつた。そこへもつて二月のはじめからスプラインを介して始まつていた昭電との話し合いがかなりスムーズに展開していったことがフィリップス社首脳陣に別な考え方を生ずるよう迫つたとしても不思議ではない。

昭和電工がパートルスビルのフィリップス・ペトロ

九日であり、昭電が契約するまで十日近い時間があつた。

一方、フィリップスがこの間に取った行動はかなりの巧妙であつた。フィリップスとは仮契約が整つた

らいつらでも提供するといつてその実施を見送つていた。それが突然のように仮契約に調印する前にサンプルの提供に踏み切つた。

しかも、「現地時間九日に佐竹代表に非独占契約書のドラフトをお渡ししたの

は古河が一日も早く日本政府の認可が得られるよう取り計らつたものだ。とくに

来週は日本の他の会社を交渉する予定だが、その前にこうした措置をとるのは古河に対する当社の好意以外

何もでもない」と、カーンが大倉商事ニューヨーク支店長に語つたのは何を意味してゐたのか。

フィリップスは古河の交渉態度があまりに慎重なため、いざよふが興味を失いつつあつたことは明らかであつた。そこへもつて二月のはじめからスプラインを介して始まつていた昭電との話し合いがかなりスムーズに展開していったことがフィリップス社首脳陣に別な考え方を生ずるよう迫つたとしても不思議ではない。

昭和電工がパートルスビルのフィリップス・ペトロ

九日であり、昭電が契約するまで十日近い時間があつた。

一方、フィリップスがこの間に取った行動はかなりの巧妙であつた。フィリップスとは仮契約が整つた

らいつらでも提供するといつてその実施を見送つていた。それが突然のように仮契約に調印する前にサンプルの提供に踏み切つた。

しかも、「現地時間九日に佐竹代表に非独占契約書のドラフトをお渡ししたの

は古河が一日も早く日本政府の認可が得られるよう取り計らつたものだ。とくに

来週は日本の他の会社を交渉する予定だが、その前にこうした措置をとるのは古河に対する当社の好意以外

何もでもない」と、カーンが大倉商事ニューヨーク支店長に語つたのは何を意味してゐたのか。

フィリップスは古河の交渉態度があまりに慎重なため、いざよふが興味を失いつつあつたことは明らかであつた。そこへもつて二月のはじめからスプラインを介して始まつていた昭電との話し合いがかなりスムーズに展開していったことがフィリップス社首脳陣に別な考え方を生ずるよう迫つたとしても不思議ではない。

あいつがつかねて現地報告

佐竹は小泉に対して「早速にもこのドラフトにサインしていただきたい」と追つた。しかし、二月まで

理由はいま少し、三井、佐竹の契約条件と比較してみる必要があるが、これは當局が承認するが、二応

佐竹は任方がカーン宛に「サインすることは間違いないが、契約書の発送まで

四月十七日朝の古河電工本社は忙しかつた。小泉は

関係者に再三、ポリエチレン事業の前途について確認を求めたあと、さややく仮契約書にサインした。佐竹は

直ちにフィシベックス宛に「本日、社長がサインした契約書一通を郵便にて発送した。また、インシナル・ペイメントについては大倉商事ニューヨーク支店を通じて供託することを保証する手続きを取つた。今後のことは一切よろしく取り計らわれた」と、この内容の至急電を打つた。

日本時間十七日は、パートルスビルでは十日である。思い起すまでもなくこの十六日はカーンと安西の交渉が原則的な同意に達し、明日はいよいよ仮契約書を作つてお互いにサインすることを確認し、お祝ひだといつて晩餐会を開いた日である。フィリップスは事実上、昭和電工を主契約者に選んだのである。

佐竹が打つた「サイン完了」の電報は現地時間十七日の朝にはフィリップスの手元に届いていたと思われ、ここからの事態はきわめて複雑な様相を呈すると同時に、フィリップスといふよりはアメリカカイギリを中心とした先進国におけるビジネスマンのパーゲニング・パワーの凄まじさを古河はいよいよ感じ取つておられた。

佐竹は目の前が真っ暗になる思いだつた。電文には「昭和電工」の「シヨウ」の字もなかつた。しかし、昭和電工が契約者であることはその電報の到着と前後して大倉商事ニューヨーク支店長からの国際電話で事情だけはつかむことができた。

小泉は激怒した。その怒りはやがて佐竹に向けられた。佐竹の交渉技術に手落ちがあつたのではないかといふのである。たしかに手落ちといへばいい。といつても、そこがどうだといふには余りにも複雑であり、過酷な結果でありすぎたといへよう。(敬称略)

(筆者は梅野雄平本紙主幹)

巧妙なフィリップス

古河電工技術部長佐竹がカーンから非独占契約書のドラフトを受け取つたのが

たかも契約が整つたことを前

提としたかのような対応ではないか。もっといえばこのサンプルの提供について

は古河がつかねてから要求してゐたものであり、フィリップスは仮契約が整つた

らいつらでも提供するといつてその実施を見送つていた。それが突然のように仮契約に調印する前にサンプルの提供に踏み切つた。

昭和と彩った

日本の石油化学工業

＝◎＝

題字は三井石油化学
相談役鳥居保治氏

水泡に帰した計画

佐竹にしてみれば小泉が、自ら自分を責めてもせうにもなる話ではなかった。もつといえは四月二日の時点で小泉に電話で「自分に仮調印の代表権を委任して欲しい」と頼んだのに「考へおへ」の一言でかたづけおきながら「いままどう何をいつか、怒りたいのはこつきたらどう思いがあつた。しかし、佐竹は耐えた。いまは社長と言い争つていゝる時ではない。何とか最後策を講じなければと焦つた。抗議文を何通も作成して、たて続けに社長エンターコットをはじめカーン、フィッシュベックに電報を打った。

「当社は十七日にサイン済みの契約書を発送した。済みの契約書を発送した。

「弊社は交渉中から終始古河以外にも交渉希望者があつたことを伝えていた。これは「記憶の」ことを思う。交渉事はすべて取り決める最初に完了した者が実施権を取得する。これはいかなる國の商慣習に照らしても至極當然のことである。同じことを今回契約した他の日本の会社に対しても弊社は説明してきた。結果として十七日発電を受



小泉幸久氏

「これに対するカーンの返事は「当方は古河の契約書を現実手にしていません。電報だけで契約が成立したと考へるのは当社の意思に反する」とあつた。

「この回答を直つたに四月十九日、フィリップス社長エンターコットから小泉宛に航空便が寄せられた。

「この電報は一切が終了したことを告げていた。このあと大倉商事ニュー

ヨーク支店長武田熊太郎はカーン、フィッシュベック、ヤング、ペルらフィリップスの渉外担当グループと全食して、席上「何とかならんのか。これでは古河は泣いても泣ききれない」と彼らに迫つた。「あなたの立場には同情するが、昭電は十六日の時点ですでにインシアルの金を積むことを承した。丸紅飯田が全額立て替える手続をとるとい

せたといいていことになる。それにしてはフィリップスの交渉のテクニックには目をみはるものがある。古河が「サインした」といふ電報を左の手に握りながら、右の手に独占契約のドラフトを握りかきして昭電に「非独占よりは独占の方が得だ」と迫る。昭電が断つたら古河と契約したであらう。非独占ならちつちと契約しても同じだから、優先権を確保している古河と契約した方が無難である。それに背徳だといつて批判されないで済む。

「非独占よりは独占の方が得だ」と迫る。昭電が断つたら古河と契約したであらう。非独占ならちつちと契約しても同じだから、優先権を確保している古河と契約した方が無難である。それに背徳だといつて批判されないで済む。

「非独占よりは独占の方が得だ」と迫る。昭電が断つたら古河と契約したであらう。非独占ならちつちと契約しても同じだから、優先権を確保している古河と契約した方が無難である。それに背徳だといつて批判されないで済む。

「非独占よりは独占の方が得だ」と迫る。昭電が断つたら古河と契約したであらう。非独占ならちつちと契約しても同じだから、優先権を確保している古河と契約した方が無難である。それに背徳だといつて批判されないで済む。

「古河電工社長の小泉さんが来られて、とんでもないことになった。昭和電工がわれわれを出し抜いて契約してしまつた。こんなほかな話はない、ともうはた目にも気の毒なくらい落胆しておられた。こんな報告を聞く一週間ほど前まではいよいよ契約しますから外資取締役の認可ができたけり、早くも入るさうな願ひをもち、おれらも何となく見せておられたが、何とも慰める言葉もなかつた。何が原因だらうかは當時、あまりよく分からなかつたが、聞いているわれわれにとつても大変ショックな出来事であつた。

「古河電工社長の小泉さんが来られて、とんでもないことになった。昭和電工がわれわれを出し抜いて契約してしまつた。こんなほかな話はない、ともうはた目にも気の毒なくらい落胆しておられた。こんな報告を聞く一週間ほど前まではいよいよ契約しますから外資取締役の認可ができたけり、早くも入るさうな願ひをもち、おれらも何となく見せておられたが、何とも慰める言葉もなかつた。何が原因だらうかは當時、あまりよく分からなかつたが、聞いているわれわれにとつても大変ショックな出来事であつた。

「古河電工社長の小泉さんが来られて、とんでもないことになった。昭和電工がわれわれを出し抜いて契約してしまつた。こんなほかな話はない、ともうはた目にも気の毒なくらい落胆しておられた。こんな報告を聞く一週間ほど前まではいよいよ契約しますから外資取締役の認可ができたけり、早くも入るさうな願ひをもち、おれらも何となく見せておられたが、何とも慰める言葉もなかつた。何が原因だらうかは當時、あまりよく分からなかつたが、聞いているわれわれにとつても大変ショックな出来事であつた。

「古河電工社長の小泉さんが来られて、とんでもないことになった。昭和電工がわれわれを出し抜いて契約してしまつた。こんなほかな話はない、ともうはた目にも気の毒なくらい落胆しておられた。こんな報告を聞く一週間ほど前まではいよいよ契約しますから外資取締役の認可ができたけり、早くも入るさうな願ひをもち、おれらも何となく見せておられたが、何とも慰める言葉もなかつた。何が原因だらうかは當時、あまりよく分からなかつたが、聞いているわれわれにとつても大変ショックな出来事であつた。

「古河電工社長の小泉さんが来られて、とんでもないことになった。昭和電工がわれわれを出し抜いて契約してしまつた。こんなほかな話はない、ともうはた目にも気の毒なくらい落胆しておられた。こんな報告を聞く一週間ほど前まではいよいよ契約しますから外資取締役の認可ができたけり、早くも入るさうな願ひをもち、おれらも何となく見せておられたが、何とも慰める言葉もなかつた。何が原因だらうかは當時、あまりよく分からなかつたが、聞いているわれわれにとつても大変ショックな出来事であつた。

「古河電工社長の小泉さんが来られて、とんでもないことになった。昭和電工がわれわれを出し抜いて契約してしまつた。こんなほかな話はない、ともうはた目にも気の毒なくらい落胆しておられた。こんな報告を聞く一週間ほど前まではいよいよ契約しますから外資取締役の認可ができたけり、早くも入るさうな願ひをもち、おれらも何となく見せておられたが、何とも慰める言葉もなかつた。何が原因だらうかは當時、あまりよく分からなかつたが、聞いているわれわれにとつても大変ショックな出来事であつた。

「古河電工社長の小泉さんが来られて、とんでもないことになった。昭和電工がわれわれを出し抜いて契約してしまつた。こんなほかな話はない、ともうはた目にも気の毒なくらい落胆しておられた。こんな報告を聞く一週間ほど前まではいよいよ契約しますから外資取締役の認可ができたけり、早くも入るさうな願ひをもち、おれらも何となく見せておられたが、何とも慰める言葉もなかつた。何が原因だらうかは當時、あまりよく分からなかつたが、聞いているわれわれにとつても大変ショックな出来事であつた。

「古河電工社長の小泉さんが来られて、とんでもないことになった。昭和電工がわれわれを出し抜いて契約してしまつた。こんなほかな話はない、ともうはた目にも気の毒なくらい落胆しておられた。こんな報告を聞く一週間ほど前まではいよいよ契約しますから外資取締役の認可ができたけり、早くも入るさうな願ひをもち、おれらも何となく見せておられたが、何とも慰める言葉もなかつた。何が原因だらうかは當時、あまりよく分からなかつたが、聞いているわれわれにとつても大変ショックな出来事であつた。

「古河電工社長の小泉さんが来られて、とんでもないことになった。昭和電工がわれわれを出し抜いて契約してしまつた。こんなほかな話はない、ともうはた目にも気の毒なくらい落胆しておられた。こんな報告を聞く一週間ほど前まではいよいよ契約しますから外資取締役の認可ができたけり、早くも入るさうな願ひをもち、おれらも何となく見せておられたが、何とも慰める言葉もなかつた。何が原因だらうかは當時、あまりよく分からなかつたが、聞いているわれわれにとつても大変ショックな出来事であつた。

「古河電工社長の小泉さんが来られて、とんでもないことになった。昭和電工がわれわれを出し抜いて契約してしまつた。こんなほかな話はない、ともうはた目にも気の毒なくらい落胆しておられた。こんな報告を聞く一週間ほど前まではいよいよ契約しますから外資取締役の認可ができたけり、早くも入るさうな願ひをもち、おれらも何となく見せておられたが、何とも慰める言葉もなかつた。何が原因だらうかは當時、あまりよく分からなかつたが、聞いているわれわれにとつても大変ショックな出来事であつた。

（筆者は梅野操本紙主幹）

昭和と彩った

日本の石油化学工業

＝◎＝
題字は三井石油化学
相談役鳥居保治氏

第三の製造技術

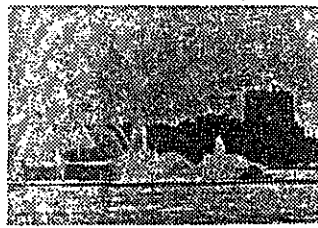
両社対立の中で時の大蔵大臣池田勇人が、日頃から親しい日清紡績社長松田武(後日経連会長)に昭電、古河の仲介役を買って出るよう依頼した。池田は大正十四年(一九二五)大蔵省に入って最初の行政経験が昭和二年(一九二七)の古河銀行の倒産であった。以来、古河財閥との付き合いが始まり、戦後も何かと相談にあずかることがあった。その関係で古河と昭電の事件を黙ってみているわけにいかなくなってきたのである。

和解の手打ち式
松田は昭電専務鈴木とは戦後の経済同友会設立当時からの同志であったが話

会合は両社の縁構が縁縁だけに最初はかなりきこまないやりとりがあったが、松田、今里ともに豪放磊落な性格の持ち主だけに「いつまでも過ぎ去ったこと」にこだわってはいない。天下の大事は成らないなどと思得するのにも驚きあり、酒が入るにつれて打ち解けるようになった。

この時の会合についての鈴木は記憶は鮮明である。「フィリップスのことについてはお互いに何も言いませんでした。しかし、きちこなかつたことはしかたがありません。時間がたつにつれ、酔いも手伝ったせいか、小泉さんは大變興奮になられて踊りなんか披露された。これ一件落着くと安心していただけで、後には干渉でアルミ事業をやめるために

隣接した空き地を手にいれようとしたそれが古河電工の持ち物だった。これを譲って欲しいと申し入れたんだが、なかなか聞いてもらえず会合を往生しました。結局、随分件をかいた上で古河系主力設備機関の首脳を煩わしてようやく譲り受けることができたというところがありました。



スタンダード社本社

古河の昭電に対する恨みはまさに七年経つのに近いものがあつた。古河の前みがわかる気がしないでもない。古河電工にしてみれば自分だけの仕事で失敗したならこそ面を屈せず済んだかも知れないが、彼が護衛をはじめ旭電化など同系企業七社を代表して進めていた仕事をへんじたと

いうことはグループ内における古河電工の威信を失墜するに十分なものがあつたというところである。

松田主催の手打ち式が終つて二十日ほどたった頃、失意の中にあつた小泉に朗報がもたらされた。それは五月はじめ以来、アメリカの電線市場の調査のために出張していた生産技術担当常務立脇耕一がもたらしたものであつた。

今回の小泉の決断は早かつた。早速に対価その他の条件について交渉を開始せよ。とくに、フィリップスの経緯や古河化学計画について十分説明した上でインディアナの協力を取りつけること。仮契約調印の権限を与えるので本社が了解した時点で速やかに調印せよと指令した。

ルアとの間で無事、仮契約の調印を済ませた。当時、スタンダード・インディアナ法ポリエチレンは多孔隙質体を主体として酸化モリブデンを主体に金屑ノタと組み合わせた触媒を使い、一気圧で三〇〇度前後の温度下に芳香族炭化水素油を溶剤として反応させるプロセスであつた。フィリップス法が酸化モリブデンと酸化クロムを触媒としていたので、酸化クロムが金属ノタに変わっただけという点でどちらも重合物としてのポリエチレンとしては同質のものと思はれていた。

スタンダード法導入へ

スタンダード法導入へ 今回の小泉の決断は早かつた。早速に対価その他の条件について交渉を開始せよ。とくに、フィリップスの経緯や古河化学計画について十分説明した上でインディアナの協力を取りつけること。仮契約調印の権限を与えるので本社が了解した時点で速やかに調印せよと指令した。

フィリップスとの交渉とはまさに機変りである。この結果、報告もたせられてから半月後の七月十日、立脇は小泉の「早くてよ」という西援のもとにアメリカ・イリノイ州シカゴ市南ミシガン街のスタンダード・インディアナの本社で同社社長I・O・ブ

はまさに機変りである。この結果、報告もたせられてから半月後の七月十日、立脇は小泉の「早くてよ」という西援のもとにアメリカ・イリノイ州シカゴ市南ミシガン街のスタンダード・インディアナの本社で同社社長I・O・ブ

はまさに機変りである。この結果、報告もたせられてから半月後の七月十日、立脇は小泉の「早くてよ」という西援のもとにアメリカ・イリノイ州シカゴ市南ミシガン街のスタンダード・インディアナの本社で同社社長I・O・ブ

(筆者は梅野伸彦本紙主筆)

昭和と彩った

日本の石油化学工業

—19—

題字は三井石油化学
相談役鳥居保治氏

心強い後ろだて

調印のあとの晩餐パーティーの時、インディアナ会長・フライナーが立脇の側に来て「スタンダード法による工業化はまだ行われていないが、古河がやってみて行き詰まった時はエッソ・リサーチ・アンド・エンジニアリングが総力を上げて問題の解決に当たるから決して心配しないでくれ」と言った。立脇はロックフェラーのエッソ・グループが後ろにいるだけで心強いのに、その石油化学分野で世界的に知られる研究所が直接、協力してくれるとは何と幸運なことかと感謝した。

だが、後にこの技術がどうにもならない代物だと気がついた時にはフライナーの言葉は七感しへ感じさせ

たものはなかった。

古河化学が発足

立脇はこの月の二十日過ぎに帰国した。帰国した立脇を迎えた古河系各社の首脳陣は大変な喜びようであつた。それは三カ月前の屈辱感を一気に吹き飛ばすほどのものであり、その熱気は古河系企業集団による石油化学事業計画を象徴する「古河化学」の設立に向けて一気に加速した。政府外資審議会へのスタンダード法ポリエチレンの技術導入申請の手続きも立脇が帰国した十日後、日銀の窓口

に提出するといふスピードで進められた。

昭和三十一年（一九五六）十一月一日、古河系企業集団の期待を担う「古河化学」

が資本金十二億円で創立された。出資比率は古河化学三六%、横濱護謨一六%、旭電化一〇%、古河鋳業、富士電機、富士通信機（現富士通）、日本セオン各七%、日本軽金属、第一銀行（現第一勧業）各三・三%、朝日生命、日本石油各一六%で残り〇・二%は古河マグネシウム、古河電池などが出資した。

社長にはインディアナ法ポリエチレン技術家としてきた立脇が就任した。日本石油化学が株主に名を連ねたのは、昭和三〇年まで張り合つた姿勢を示していた小泉が原料面で地位に立つにはセンター企業の協力が必要だとして日石油化学社長佐々木を口説き落としたものである。

この結果、佐々木は小泉に請われるままに古河化学の監査役を引受けしたが、

一年ほどして常務林を交代した。

古河化学がスタンダード法ポリエチレン年産九千トンの技術導入申請を政府外資審議会に提出したことで政府の主力には三つのポリエチレン技術の申請が溜まっていた。

ひとは古河であり、あとは三菱油化のBASF法一万吨と昭和電工のフィリップス法一万吨合計三万吨である。

通産省はすでに三井石油化学のチーグラー法ポリエチレン年産二万吨、住友化学のICI法一万吨、合計三万吨の認可を行つており、当面はこの両社のポリエチレンで市場は間に合ふという判断に立つていた。その判断基準は昭和三十五年（一九六〇）の需要は三万五千トだが、輸入を含めると二万需給はバランスするといつもので

あった。

しかし、三菱と三社の認可要請は熾烈をきわめた。原局である精工薬局では局長齋藤正年、有機化学第一課長宮沢統誠、石油化学学部長吉田正樹が連日、額を集めて対心を協議していた。

その間にも昭和電工などはフィリップス涉外担当役員であるカーンを日本に呼び寄せ、安西、鈴木が連れ立って大蔵大臣池田勇人、通産大臣佐藤栄作、日本銀行総裁一田尚登ら政府要人に直接面会してフィリップス法ポリエチレンの早期認可を願つたといふ高度な政治力を発揮していた。

カーンはこの時會つた池田と佐藤について将来、総理大臣になる入たを語つて安西、鈴木を驚かせたといふ。

政治的に動いていたのは何も昭和ばかりではない。古河も三菱もそれぞれに政界、官界の要路を頼つて激しく陳情していた。こつこつとことから地道な検討を行つてゐる齋藤、宮沢、吉田ら直接、行政に携わつてゐる連中への風当たりは日増しに強まった。

3 社認可の事件は

こんな騒ぎの中で齋藤は日本生産性本部が企画したアメリカ産業に対する官民調査団の政府側代表として渡米した。昭和三十一年（一九五六）八月中旬のことである。齋藤がポリエチレンの技術導入認可の処理をそのままにして渡米したのは、いさよと自分の目でアメリカの石油化学の現況を確かめたいと考えてのことであつた。だが、齋藤にはいま一つの大きな目的があつた。

この当時、合成ゴムの國産化をめぐる動向がわかにかましくなりつつあつた。とくに合成ゴムの國産化を國策として推進するといふ案が浮上しつつあつた。齋藤としてはこの國策事業に政府がどう係わるべきかについて、まずアメリカの合成ゴム産業の実態をつぶさに視察しておく必要があつた。

約三週間の調査日程をこなし、帰国した齋藤が十一月に下した結論は「昭和三十一年度のポリエチレンの需要は四万七千トに達するであろう。この結果、三社の能力を全部認めても工期間の不足や、稼働率を考慮すると供給上に混乱を起す恐れはない」というものであつた。



一田尚登氏

の能力を全部認めても工期間の不足や、稼働率を考慮すると供給上に混乱を起す恐れはない」というものであつた。

四万七千トという数字は、当初の見込みに対して一筆に二万二千トも多くなつたこと、一般には当局も政治的な圧力が強くなつてどうも行政の力では調整できなくなつた。そこで三社とも認めるという高度の政治判断を行った」とみる向きが多かつた。しかし、現実にはさうではなかつた。

背景としては需要部門別に積み上げたところであつたといふだけだ。内訳はフィルム一萬七千ト、パイプ一萬三千ト、電線被覆その他一萬ト、成形品七千トとなつた。

一方、当局は主だった需要家と申請三社にも需要推定を行つたことを依頼した。その平均は四万八千二百トで、当局の推定との間にわずかに千二百トの差しかなかつた。この結果、当局は独自に行つた需要推定の結果に大きな自信をつけたようであつた。（敬称略）

（筆者は梅野揆彦本紙主幹）

昭和と彩った

日本の石油化学工業

＝◎＝
題字は三井石油化学
相談役鳥居保治氏

事業化めぐる明暗

「ついで後発三社は二斉に走り出したわけだが、事業的には先発二社も含めて二〇から大きく明暗を分けるとなりました。」

そして最初から幸運に恵まれた企業とかなり苦しんだところがあったことは否めない。しかし、最後まで栄光を味わうことなく終わった企業もあったことは、人間社会の縮図をあまり変わらないといつてもいいのではなからうか。

後発3社の苦しみ

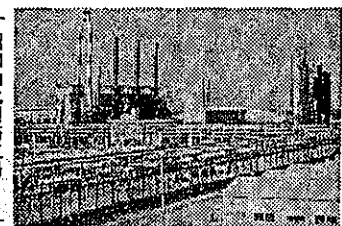
ポリエチレンには高圧法と中圧法、それに低圧法があることはこの頃になると関係者の間で知られるようになっていたが、それらの方法で作られるポリエチレンの物性までが違つては一般には分かっていなかった。

昭和のニューヨーク駐在員川口寛(後参与)は回顧録「石油化学」ほれ話の中で、この認識不足に多大苦勞をさせられた、次のように述べている。

「ある日、突然、安西副社長から厳しい指示が届いた。そこには、フィリップスはわわれわれに対して当社のポリエチレンはフィルムを含むすべての成形分野に使用できるという説明があったが、これは事実と反するのではないか。日本の市場はフィルムが中心である。フィリップス社が入って敵軍に抗撃せよとあった。自分は高圧法で作る低密度ポリエチレンと中圧法で作る高密度ポリエチレンの違いをある程度知っていたが、とにかくフィリップス社本社へ行つて直接の責任者であるカーン

とフィッシュバック両部長に副社長の趣旨を伝えた。そして二人とも傍らのショーケースを指して、安西さんはここに並んでいるサンプルを見て契約していったんだ。フィルムもできないことはないと言ったが、高圧法と同じものができるとは一言も言っていない。と大仰に両手を広げて笑つてみせた。」

昭和油化川崎工場



というのは三井石化を創立した石田が初めてチークラーからサンプルをもちつた時にもあったが、同社はそれを口にするのは企業の責任だ」というチークラーの言葉を帯して触媒の酸化が原因の一部を成していることを突きとめ、いち早く解決した。だが、スタフレンはそれほどいかなかった。その上、成形品が割れるという問題を抱えていた。

リエチレン(ハイゼックス)も同じ状況にあった。しかし、それ以上にスタンダードポリエチレン「スタフレン」を企業化した古河化学はもっと悲惨な状況を迎えていた。

重合装置から出てくるレジンは白いと期待していた運搬員が目にしたのは全部茶褐色のレジンであった。ミルクを入れたコビー色は金属ソーダであった。

シェア確保にしのぎ

三十六年に古河化学に入ってスタフレンの重合技術の改良やゼロブランド(スタフレン)重合装置の改良設備の建設に取り組んだ飯田盛也(後日石合創製)品技術・開発本部長は言う。

「茶褐色の色がどうしても抜けないので毎日悩んでいた。その頃、生産技術担当をしてもらった佐竹専務が、そんなものを洗剤で洗えば落ちる。と、どこでもそうやっていたんだなんていうもんだから、それじゃあ、いっついで松島照海さんという高砂香料から古河に移つてこられた現場のエンジニアの責任者がレジンを大きな桶に入れてほとんど洗剤をぶち込んで洗っちゃった。そうしたら作業場が泡だらけになって往生した。」

た。この点は「ショウレックス」はレジンとしての物性にそう大きな問題を生じていなかった。スタフレンとショウレックスの触媒は同じようなものであった。いずれも主触媒は酸化モリブデンであり、助触媒だけが異なっていた。ショウレックスは酸化モリブデン、スタフレンは金属ソーダであった。そのうち重合液をフィルターにかける作業をしていく現場からフィルターの目づまりを除去する際に触媒に使っている金属ソーダに作業員の汗が落ちて火花が出て危ない。能率も上がらないという苦情が出てきた。実は重合収率を上げるために酸化モリブデンと金属ソーダの配合比をいろいろと変えているうちに金属ソーダの比率を上げた方が目的になつたといふことで二対一くらいにしていた。ところが作業上でもいかならんといふので、いっそのこと金属ソーダの配合比をもつて一対一くらいにしようとした。そして酸化モリブデンの比率を上げていって最終的には十対一くらいにしてしまった。そして気がついてみたら茶褐色の色がつかなくなつていった。重合収率もあまり変わらないといふことも分かって何だか狐に摘まれたような気分になった。」

このような辛酸をなめたがらの工業生産であった。いかに工業化実績のない技術をもつてのいることが難しさを例証している。だが、このスタフレンにはもっと大きな問題があった。それは紫外線強度が非常に弱かったことである。皮肉なことに昭和のショウレックスはフィルムなどの軟質ものができないといつて悩んでいたが、スタフレンはその軟質ものに向いた物性を発揮した。とくに袋ものなどを作るインフレーションや荷物を縛るのも、すなわちヤーンなどの市場が形勢されるかに見えた。といつても高圧法がフィルムを中心である以上、その大きな市場を確保できるというわけにはいかなかった。このため中圧法本来の市場である成形品、例えば大型のパケツとか、大型の薬品瓶、その他パイプのレックシールド、エンジンカバーなどの成形品市場に力を入れることになつた。この市場はずで三井のハイゼックス、昭和のショウレックスが縮(じ)のぎを削りながら市場占有率を確立しつつあった。とにかくフィルムやテクスヤーンだけではどうにもならないことは明らかであった。(敬称略)

(筆者は柳野極彦本紙主筆)